

不登校対応における直接的コミュニケーション促進のためのICT活用

村山 大樹 (文教大学教育研究所客員研究員)

今田 晃一 (文教大学教育学部)

Study about Using of ICT for Supporting Direct Communications of Students on the School Refusal.

MURAYAMA TAIKI , IMADA KOICHI

(Guest Researcher Institute of Education, Bunkyo University)

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

本論文は、平成23年度文教大学大学院教育学研究科修士論文「不登校児童生徒への対応におけるICTの活用」を基に、その後の技術進歩によりICT活用の可能性が広がった部分について加筆、編集しなおしたものである。ICTの活用は、学校復帰や登校刺激等の直接的な効果については大きな期待はできないが、その前段階である不登校同士、支援者とのコミュニケーションを促進すること等、間接的なつながりを構築する上では大変有用であることが、実践を通して明らかとなった。

1. はじめに

近年教育の情報化が進展し、授業でのICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術とそれを活用した機器、以下「ICT」と略す) の活用が進んでいる。文部科学省からは、2020年度に向けてデジタル教科書および児童生徒一人一台の情報端末(タブレット型情報端末が想定)の整備を始めとするトータルな構想が打ち出された。

これまで筆者らは、文部科学省が示した「教育の情報化ビジョン(以下『ビジョン』と略す)」¹⁾に基づき、授業におけるタブレット型情報端末の有用性について実践を重ね、特に子どもたちの協働学習で有効な機能を明らかにした^{2~5)}。

他方、小・中学校の不登校児童生徒数は依然として11万人を超えており、教育機会の喪失は大きな課題となっている⁶⁾。社会復帰のためには、人や物事との直接的つながりを

支援していくことが重要であるとされている。

こうした中、不登校対応においても、電子メールやテレビ電話といったICTを活用した実践が行われてきた。その有用性として、間接的であるが段階的に確実なつながりをつくっていけることが挙げられている。しかし、数々の実践が行われているものの、それを総括するような具体的な機器や、システムまで含めた提案はまだないのが現状である。

そこで筆者らは、これまでの研究や実践を整理し、不登校進行段階に応じたICT活用表(表1)を作成、提案した^{7~8)}。これにより、現時点での、不登校の進行段階ごとに有効と思われるICTの活用方法を提示することができた。実際にSkypeなどの遠隔システム等によって、間接的なコミュニケーションを図ることに大きな効果を発揮した^{9~11)}。

そこで本研究では、ICT活用表を基に、様々な不登校進行段階の生徒が通うA市適応指導

表1 不登校進行段階に応じたICT活用表

不登校進行段階	ICT活用目的	使用する機能	活用留意点
I 予備期	<ul style="list-style-type: none"> Web相談 メール相談 Web上個別学習教材 コミュニケーション補助 	Skype, Face time PCメール, 携帯メール クラウド, ホームページ 筆談アプリ 画像拡大・縮小機能 インターネット	本格的な不登校に移行しないための活用。日頃の悩みを気軽に相談できるような環境が必要。メールアドレスや端末情報等のプライバシーに配慮する。
II 混乱期	<ul style="list-style-type: none"> Web相談 メール相談 コミュニケーション補助 	Skype, Face time PCメール, 携帯メール 筆談アプリ 画像拡大・縮小機能 インターネット	児童生徒の不登校という状態になったことへの混乱をケアするための活用。学校や社会への拒否感が大きい時期でもあることに留意し内容を考える。
III 安定期	<ul style="list-style-type: none"> Web相談 メール相談 対人関係形成補助 コミュニケーション補助 情報収集 	Skype, Face time PCメール, 携帯メール 共同操作系アプリ(筆談, お絵かき, 写真等), インターネット 筆談アプリ 画像拡大・縮小機能 インターネット インターネット	不登校児童生徒の世界を広げるための活用。新たな情報や人と積極的につなげていくための活用が必要。
IV 葛藤期	<ul style="list-style-type: none"> Web相談 メール相談 対人関係補助 コミュニケーション補助 遠隔による参加 Web上個別学習教材 情報収集 	Skype, Face time PCメール, 携帯メール 共同操作系アプリ(筆談, お絵かき, 写真等), インターネット 筆談アプリ 画像拡大・縮小機能 インターネット Skype, Face time クラウド, ホームページ インターネット	不登校児童生徒の挑戦を後押しするための活用。こちらから情報を出すよりも、児童生徒の興味・関心に基づいて活用内容を考える。
V 社会復帰期	<ul style="list-style-type: none"> Web相談 メール相談 	Skype, Face time PCメール, 携帯メール	社会復帰を継続させていくための活用。復帰中の児童生徒が受けるストレスに配慮し、常につながっているという安心感を与えられるようにする。

表2 適応指導教室で対応した不登校生徒の特徴

	①学年・性別、②学習の様子、③対人関係、④性格・特徴 等	ICTへの関心、 利用状況
A男	①中学3年・男 ②基本的には時間通りに取り組むが、なまけることがある ③同年代や大人と話すことに抵抗はない ④優しい、適応指導教室では中心的存在 マイペース 相手に合わせられる反面、気をつかい過ぎてしまう	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢相応の関心を持っている ・携帯電話、インターネット、ブログを利用している
B男	①中学3年・男 ②受験に関わる学習に積極的に取り組んでいる ③目上の人の前では大人しい、同年代の子どもとの会話では強い口調が出やすい ④興味のあることに積極的 自己主張が強い 自分が興味を持たないことに関する集団活動が苦手（拒否する）	<ul style="list-style-type: none"> ・関心自体は低い ・携帯電話で芸能人の画像等をダウンロードしている
C男	①中学3年・男 ②強い拒否感を示し、取り組もうとしない ③打ち解けるとよく話す、自分から積極的に関係を作ろうとはしない ④優しい、周囲を和ませる 独自のペースがある（やる気の幅が激しい） なまけ心が出やすい	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい機器への関心が強い ・携帯電話を利用している程度
D男	①中学2年・男 ②拒否感を示すものの、取り組む ③大人に話を合わせられるが、緊張が強い 同年代には関係が浅い者に対して冷たい部分がある ④人を笑わせるユーモアを持つ 独自の価値観がある 固定観念にとらわれやすい	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢相応の関心を持っている ・携帯電話、インターネットを利用してしている
E子	①中学2年・女 ②自分の学習方法が確立しており、教科によっては学校の進度にある程度追いついている ③誰とでも分け隔てなく話せる ④行動を自分で決めて進められる 周囲を見ながら行動する 決めたことに変更がある時に柔軟な対応が苦手	<ul style="list-style-type: none"> ・機器やソフト等に強い関心を持っている ・携帯電話、インターネット、動画投稿サイト、ブログを利用している
F子	①中学2年・女 ②教科によってやる気に差がある ③同年代とも大人とも気軽に話せる ④周りの子を遊びに誘うなどの配慮ができる 自分に良くしてくれる人に愛想がいい 自己中心的な部分がある	<ul style="list-style-type: none"> ・機器やソフトにやや強い関心を持っている ・携帯電話、インターネット、動画投稿サイト、ブログを利用している
G子	①中学2年・女 ②自分なりの進め方があり、着実に取り組む ③誰とでも話せるが、時折拒否感の強い話し方になる ④まじめにこつこつできる 負けず嫌いである 新しいことに対し消極的になる	<ul style="list-style-type: none"> ・それほど高い関心は持っていない ・インターネット、動画投稿サイトを利用している

教室において、継続的な実践を行い、その効果についてさらなる検討を行うこととする。

2. A市適応指導教室での実践

以下に埼玉県A市適応指導教室での不登校対応の実践について考察する。

本研究では、適応指導教室に通う不登校生徒との関わりの中でタブレット型情報端末の一つであるiPadの活用を中心に行った。その中でも主に関わった7人の生徒についての実践をまとめる。

ただし、この適応指導教室での実践については、生徒個人が特定できないように記述には細心の注意を払うことで、A市教育相談センター所長、及び適応指導教室相談員の先生方と当初より協議を重ねてきた。文章は全て所長及び相談員の先生方の許諾を得てから公表することとした。

(1) 目的

A市適応指導教室での活動に、ICTを導入し、不登校児童生徒の直接的コミュニケーションを促すためのICT活用として、その可能性および活用留意点を検討することが目的である。

(2) 方法

補助員としての不登校生徒との関わりの中でiPadを導入し、その効果について検討する。対象としたのは、適応指導教室に通室している生徒の内7名（男子4名、女子3名）である。表2として本事例の生徒の特徴をまとめた。

実践は、主に①個別学習の時間、②集団活動の時間、の2つの場面で行った。以下に、
i. 導入時、ii. 個別学習時、iii. 集団活動時における実践の様子をまとめ、学校現場での実践との差異も含め、不登校対応におけるICT活用の可能性について考察する。

(3) 結果と考察

以下にそれぞれの実践について、活動時の様子と結果・考察をまとめる。

i. ICT導入時の活動

各活動にiPadを本格的に導入する前に、機器の紹介と操作に関する簡単な説明を行った。実践で使用した機能およびアプリは、①カメラ機能、②拡大・縮小機能、③コミュニケーションツール機能の「Hitsudan Patt（筆談パット）」、④共同操作機能の「Finger Piano」、「黒板」、「DRAW」、⑤ニュース・新聞機能の「産経新聞HD」、⑥電子書籍機能の「しかけ絵本 あかずきん」、「しかけ絵本 ももたろう」、⑦学習用機能の「ABC Phonics」、⑧ゲーム機能の「対局!!REVERSI」、「対局!!将棋」、「Air Hockey」である。なお、A男、B男、E子、F子、G子の5名は同時に、C男、D男は個別に行った。

以下に活動時の生徒の様子をまとめる。

1) 活動時の様子

[A男]

自分からは触らず、他の生徒に「どうぞどうぞ」と先に触ることを勧めた。各アプリの体験では、他の生徒が一通り触ってから自分も参加していた。「黒板」や「DRAW」といったお絵かきアプリでは、みんなの様子を見ながら自分の得意な漫画のキャラクターを描き加えて笑いを誘っていた。操作に慣れてくると、新聞の面白い記事を拡大してみんなを笑わせるなどの役割をしていた。

[B男]

機器の説明の開始時から隣の部屋に行ってしまった。「自分はいいです。やりません。」と活動への参加を強く拒否した。B男の場合、集団活動への拒否はよくあることだったため、隣の部屋のドアを開けておくと、笑い声などが上がる時にこちらをチラチラと見ていた。

機器の説明の終了後、B男が一人の時に触っ

てみるか尋ねたところ「天気予報（天気図）は見えますか？」と聞いてきた（B男はニュースの天気図を使って理科の学習をしていた）。iPadをインターネットにつないで見せると「便利ですね」と言い、画面を一緒に覗きながら、各地方の天気とこれからの予想を詳しく話してくれた。iPad自体にはそれ以上の興味は示さなかった。

〔C男〕

C男との初対面時に、緊張をほぐすことも兼ねてiPadの説明を行った。お絵かきなどのアプリには反応は示さず、初めは冷静に筆者の様子を見ていたが、天体のアプリを見せると「おお！」と歓声を上げた。星が好きなのか尋ねると「外をボーと眺めるのが好き」と答え、しばらく天体アプリでいろいろな星の位置を探していた。緊張が解けてきたので「Air Hockey」で対戦すると感情を見せるようになり、表情が和らいでいった。

〔D男〕

D男が適応指導教室に通室を始めて数日後、他の生徒が来ない日があったため、関係作りを兼ねてiPadの説明を行った。本体の機能やアプリには興味を示さなかったが、インターネットで「缶コーヒーのキャンペーンについて調べたい」と言ったので、一緒にそれを見ることにした。すると、キャンペーンの内容や欲しいグッズ、独自の当たる確率計算など、詳しく話をしてくれた。終了後「タッチでの検索が面白かった」とD男が言った。

〔E子〕

A男に勧められ、最初に手を伸ばしてiPadに触れた。「何やってみたい？」と他の生徒に聞きながらアプリの起動等を積極的に行った。「面白いかも」と言って、他の生徒にも操作を促した。「DRAW」では、まず丸や四角などの抽象的なものを描いて、他の生徒が描き加えていくのを見ながら共同で絵を作っていた。2人で対戦する「Air Hockey」では「1点取ったら交代していこう」と全員

が参加できるように提案していた。

〔F子〕

始めは冷静に見ていたが、E子とともにA男に勧められ手を伸ばした。「DRAW」では、E子を書いたものに積極的にキャラクターなどを加えて絵にストーリーを作っていた。一通り描くと「やってみなよ」と、まだ触っていない他の生徒に参加を促していた。「Finger Piano」では、F子はピアノを習っていたこともあり積極的に触り、上手く弾くためのコツなどを他の生徒に教えていた。また、「ABC Phonics」では、本来の使い方ではないものの、画面の発音ボタンを連打することで笑いが起こり、これまであまり参加していなかったG子と協力し、連打を更に早くできるようにと、一緒になって盛り上がっていた。

〔G子〕

適応指導教室に通室を始めてからそれほど経っておらず、普段から緊張が見られた。iPadを見た時も表情を変えず、他の生徒が触っているときも参加しようとはしなかった。

しかし、F子から一緒にやろうと誘われ、画面のボタンを押すことに協力したところ、G子が参加できたことで場が盛り上がった。すると、G子も「しかけ絵本 あかずきん」では自分からいろいろな画面を触り、仕掛けを見つけると周りの笑いととも表情が明るくなった。「Air Hockey」では負けず嫌いに火が付き「よし！」や「あー！」等の言葉と感情が自然と出るようになっていた。

2) 本実践の結果・考察

本実践の結果、子ども同士のコミュニケーションについては、お互いの様子を見ながら操作を行ったり、全員が触れるような配慮が生徒たちの中で自然に行われたりするなど、これまでに見られなかったコミュニケーションが見られた。

子どもと支援者とのコミュニケーションについては、インターネットや生徒の興味のある

る分野のアプリを一緒に行うことによって、自然と話しやすい環境を作り、何もない状態で話をするよりも緊張を和らげることができた。

本実践から、生徒各々のICT機器への興味・関心には差があったにも関わらず、どの生徒においてもコミュニケーションが促進されたことは、タブレット型情報端末の「人と人をつなぐツール」としての普遍性を示唆していると考えられ、不登校対応における有効な知見であると捉えられる。

一方で、学校で行った時の中学生の反応と、本実践での不登校生徒たちの反応において感じられた差異について特徴的であったのは、不登校生徒の方がiPadを見た時の反応が薄く、iPadそのものへの興味・関心が低かったことである。学校での実践では、初めてiPadを見たり触ったりする生徒たちからは、歓声が上がったり、iPadを離そうとしなかったりする姿が見られた。一方、適応指導教室での実践では、はじめほどの生徒もそれほどの反応は示さず、冷静に説明を聞いている状態であった。

また、自由に触れる時もお互いに譲り合い、他者に促されて操作する生徒が多かった。この姿は学校での実践の際に、話し合いに参加していなかった生徒の例に良く似ている。自分に自信が無かったり周囲の人間関係について何か悩んでいたりする場合、目の前に新しいものが現れても興味が湧かないということが推測できる。本実践で不登校生徒たちが示した反応もこれに類するものであると考えられる。つまり、グループでのICT活用時に積極的に活動に参加できない子どもは、何か他の悩みを抱えていることを示している可能性があると言える。不登校予防の視点からも、本実践での子どもたちの反応には大きな意味があったと言えるだろう。

ii. 個別学習における活用

本実践は、適応指導教室の個別学習の時間にiPadを導入したものである。

本実践におけるiPadの活用の目的は、いわゆる自己完結型のドリル型学習ではなく、「不登校児童生徒と人や物事との直接的つながりを促すためのICT活用」として、①学習自体への関心・意欲を高めるための活用、②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用の2つの視点で行った。以下に活動時の生徒の様子をまとめる。

1) 活動時の様子

[A男]

これまで学習への意欲が高いわけではなかったが、学習の時間として定められている時間は自主的に何かしらの課題を行っていた。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、インターネットを中心に学習内容に関連のある事項を検索し、教科書や問題集には載っていない事項などを補足説明として用いた。特に社会や英語の歴史的な背景に興味を持つようになり、これまで学習に飽きるとお絵かきなどをしていたのが、検索し調べ学習をする活動に変わった。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、インターネットを一緒に見ることにより、教科書だけの学習時よりも質問や意見の交換が多く行われるようになった。

[B男]

これまで教科書を使って調べながら、問題集を解くというB男流の学習方法が確立されており、iPadを活用する必要性は見出せなかった。導入時に天気予報についてのやり取りがあったため、iPadによるインターネット閲覧を用意したが、学習の時間に使うことはなかった。

[C男]

これまで学習自体に強い拒否感を示すだけ

でなく、学習の時間にも外に出ていってしまう状態が続いていた。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、iPadのゲームアプリや簡単な計算アプリを使うことで、少しずつ落ち着いていられる時間が増した。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、対戦型のゲームや計算を勝負形式で行うことで、自然と会話が増えた。また、インターネットの閲覧により、分からないことや聞きたいことを気軽に尋ねられるようになった。

〔D男〕

これまで学習に積極的ではなく、午前の学習の時間に遅刻してくるなど、参加自体が安定していなかった。教室に来れば漢字学習など自分でやることを決めて学習を行っていた。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、iPadアプリである「筆談パット」で漢字や英単語問題を出し、一問一答を楽しみながら学習の動機づけを行った。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、「筆談パット」で一問一答の問題を出し合うことでコミュニケーションを図ることができた。「筆談パット」の操作については、指で書く感覚に初めはとまどっていたが、すぐに利用できるようになっていた。

〔E子〕

これまで教科書と問題集を中心とした自分なりの学習方法で安定して学習ができており、iPadは学習を補助する形で使用した。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、自分のやり方で分からないことに関してインターネットで調べられるようにした。教科書には載っていない内容を知ると、関心が高まっていた。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、これまであまり質問等をしなかったが「筆談パット」を用いるこ

とで、疑問や不安に思ったことを気軽に聞けるようになった。

〔F子〕

これまで教科書によって学習の進度に差があり、学習していない教科ほどより強く不安感や拒否感を示していた。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、これまでほとんど手を付けていなかった英語に興味を示していたが、いきなり教科書の内容は難しかったため、英単語を練習する「1分間TOEIC」などのアプリを用い英語学習への動機づけを行った。初めはiPadを使っただけの学習が主であったが、徐々にiPadを使わなくても学習に取り組めるようになった。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、「筆談パット」によるやりとりを好み、これまで理解するまで何回も質問するということがなかったが、納得できるまで質問するようになった。

〔G子〕

これまで自分のペースで着実に学習を進めていたが、補助員への質問が少なく、理解できているかの確認がとりにくい状態であった。

①学習自体への関心・意欲を高めるための活用については、インターネットを活用して、教科書だけでは分からない内容を調べられるようにしたところ、積極的に調べる姿が見られた。

②学習時の生徒と補助員との関係を深めるための活用については、「筆談パット」によって気軽に質問できるようになり、補助員と一緒に学習を進めていくことができるようになった。

2) 本実践の結果・考察

本実践の結果、生徒と支援者とのコミュニケーションについては、iPadが両者の間にあることで、学習内容の共有化が容易になり、生徒が質問しやすい環境を作ることができた。

特に、口頭ではなくiPadによる筆談を用いた会話が、これまで質問することに抵抗があった生徒にとってコミュニケーションを促す上で効果的であった。

iPadによるコミュニケーションと、支援者の得意分野を組み合わせることで、教科書や問題集だけの学習よりも、更にその質を向上させたり、深い内容の学習ができたりする可能性がある。ただし、今回用いた「筆談パット」のように効果的なアプリが必要であることも重要な条件となる。

一方、学習自体への興味・関心を高めることについては、生徒が学習や取り組む教科に対する意欲をある程度持っている必要があるということが明らかとなった。特に意欲はあっても学習手段が定まっていない生徒には、ICTの導入が学習のきっかけ作りとして有用であると考えられる。

これまで不登校生徒の学習は、自習形式で行われることが多く、支援者と関わりを持つことが難しい場面も多かった。iPadを補助的な教材として両者の間に置いて一緒に見ることで、質問や会話の機会が増加しコミュニケーションの契機となることが分かった。このことは、不登校児童生徒の人間関係作りだけではなく、学習の質を向上させるという点においても意義があるものと思われる。

以上のことから、不登校生徒の学習場面においても、ICTの活用が直接的コミュニケーションを促すために有用であることが明らかとなった。また、本実践から学校現場では想定していなかった生徒と支援者をつなぐツールとしての有用性も示唆された。

iii. 集団活動における活用

不登校対応において、集団での活動は同年代の子どもの関わりが少ない不登校児童生徒にとって大きな意味を持つ。様々なタイプの不登校生徒が通うA市適応指導教室では、その特徴を活かし、不登校の集団対応の視点

での活動も行っている。本実践では、普段から行われている集団活動の中にiPadを導入し、コミュニケーションの促進に関する有用性について検討した。iPadの活用は、①休み時間、②ソーシャルスキルトレーニングの2つの場面でを行った。それぞれの実践について以下にまとめる。

iii-① 休み時間での活用

本実践は、適応指導教室での各活動の間の休み時間に、生徒がiPadを自由に使えるように教室内に置きその様子を観察したものである。筆者からは特に指示は出さず、生徒たちがどのように使うのか観察した。

以下に活動時の生徒の様子をまとめる。

1) 活動時の様子

[A男]

E子、F子とともに、インターネットでの検索を行う。自分から調べたいことは言わず、他の生徒の調べているものを一緒に見て会話に参加していた。B男等に「一緒に見ようよ」と声をかける姿が見られた。

[B男]

iPadの周りに生徒が集まっていると、避けるように隣の教室へ行ってしまった。A男から誘われるも「俺はやらない」と拒否していた。誰も触っていない時に「天気予報見れますか?」と言って、補助員と一緒に見ていた。

[C男]

初めはiPadを触っている生徒の周りを眺めながら様子をうかがっていた。他の生徒に誘われると輪の中に入っていった。インターネットで調べたいことを尋ねられると「別に」と恥ずかしがって答えなかったが、ゲームやお絵かきのアプリになると、突然手を出して笑いを誘っていた。

[D男]

主にインターネット検索をしているときに

一緒に画面を眺めていた。自分の調べたいことを尋ねられると、うれしそうに答え操作に加わっていった。

〔E子〕

インターネットとお絵かき関連のアプリをよく利用した。お絵かき関連のアプリでは、まず簡単な絵を自分が描き、他の生徒や補助員にも参加するように促す姿が多く見られた。他の人が描き加えることによって、絵が変わっていくのをみんなで楽しめるようにしていた。

〔F子〕

E子と共に自ら操作に加わっていた。インターネットでは自分の進みたい高校などを調べ、他の生徒や補助員に紹介していた。また、ピアノのアプリで自分の弾ける曲を披露したり、他の生徒と一緒に演奏したりしていた。あまり関わっていない生徒にも「一緒にやろう」と声をかけていた。

〔G子〕

自分から利用することはなかったが、E子やF子に誘われると少しだけ操作に参加していた。お絵かき関係のアプリでは、他の生徒と一緒に絵を描き笑顔が見られた。

2) 本実践の結果・考察

本実践の結果、生徒同士のコミュニケーションについては、インターネットなどで身近なテーマが共有されることで、自分の持つ考えをお互いに話すきっかけになった。これまで休み時間にはトランプ等を行っていたが、そのゲームに関する会話だけで終わってしまうことが多かった。インターネットやアプリという共通の話題ができることで、これまでになかった趣味などのプライベートな話も気軽に行う姿が見られた。また、あまり操作に慣れていない生徒に対し、他の生徒が教え合っている姿も見られた。不登校生徒同士が関わるきっかけとして、iPadが有用であったと考えられる。

生徒と支援者のコミュニケーションについ

ても同様に、補助員や相談員とも生徒自身の興味・関心のあることについて会話するきっかけを作ることができた。

本実践によって、生徒一人一人のICTへの興味の差に関わらず、iPadを介することでコミュニケーションの契機となり、その質を深められるという点で普遍性があることが明らかとなった。これは不登校の集団対応という視点からも意義のあるものであると考えられ、今後さらに研究を深めていく意義が認められる領域である。

不登校生徒にとって、自由な時間での人間関係形成は大きな意味があると捉えられる。授業とは違う雰囲気の中でも、ICTが人間関係形成を促すツールとして利用可能であることが確かめられたことは興味深い知見となった。

iii-② ソーシャルスキルトレーニング時の活用

本実践は、不登校生徒のコミュニケーション能力育成のために行われているソーシャルスキルトレーニング（以下「SST」と略す）にICTを導入したものである。

A市適応指導教室では、不登校生徒のコミュニケーション能力育成のため、月に1～2回SSTを実施している。本実践は、筆者が担当した回の1つである。

活動の中でICTを導入し、コミュニケーション促進についての有用性を検討する。

今回導入したものは、iPad 2、デジタルカメラ、Eye-Fiカード（デジタルカメラで撮影した写真のデータを指定した機器に無線で転送する機能を持つSDカード）である。

なお、本実践に参加したのは、生徒がD男、E子、F子、G子の4名、補助員が1名、相談員が2名、筆者の計8名であった。実践の概要を表3にまとめた。以下に活動時の生徒の様子を示す。

表3 SST（ソーシャルスキルトレーニング）
の実践概要

活動 テーマ	「犬の気持ち、猫の気持ち、モノの気持ち」
活動の 目的	他者視点を育む一貫として、身近なモノの気持ちを楽しく想像してみる。他の生徒の用意する題材や発表内容から、同じ題材でも人によって捉え方が違うことを感じる
活動の 流れ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 筆者からの説明、イヌ、ネコの画像をiPad 2で見ながらのデモンストレーション 2. 各々が題材としたい教室内のモノを考える 3. 各々が題材として考えた対象をiPad 2のカメラ及び、デジタルカメラによって撮影 4. 全員でiPad 2を囲って見ながら、全員が撮影してきたモノの気持ちを考える 5. 各題材について全員が発表 6. シェアリング

1) 活動時の様子

〔D男〕

最初の説明時には、あまり活動自体に関心がない様子で話を聞いていた。題材を考える時間では、時間を取ってすぐに「あれに決めた」と即決した。写真はデジタルカメラを選んで撮影した。iPadにデータが飛ぶことに驚いていた。それぞれの題材に関しては、写真自体はあまり見ずに想像を膨らませていた。発表時はユーモアたっぷりの発表をし、参加したメンバーの笑いを誘っていた。シェアリングでは「すっきりした」と言っていた。

〔E子〕

説明時からiPadに興味を示していた。題材を考える時間では、なかなか決められずに歩き回って題材を探した。写真はiPadを選んで撮影した。フロントカメラに気づき、し

ばらく撮影機能で他の生徒と撮り合いをしていた。それぞれの題材の写真をiPadの拡大・縮小機能を使いながら、じっくり眺め想像していた。近くの生徒と一緒に相談する姿も見られた。シェアリングでは「みんなが色んなところを見てるんだなあと思った」と語った。
〔F子〕

最初の説明時にはそれほど積極的な様子ではなかった。題材を考える時間では、自分の持ち物からいろいろと題材になりそうな物を探した。写真は、iPadのカメラを使って撮影した。E子と共に写真を拡大・縮小しながら想像をしていた。発表では、それほど殻は破れなかったが、普段とは違う面白い回答を出そうと努力していた。シェアリングでは「みんなの発表が、同じ写真を見ているのに全然違うことがあって面白かった」と語った。
〔G子〕

最初の説明時には、iPadの撮影機能に興味を持っている様子だった。題材を考える時間では、部屋全体を見渡しながら「みんなが選ばなそうな物がいい」と言ってじっくり考えていた。撮影はデジタルカメラを使って行った。D男同様、デジタルカメラで撮った写真がiPadに転送されることに驚いていた。回答を考える時間では、自分で直接は触らないが、E子、F子の拡大・縮小操作を覗きながら一緒に見て考えていた。発表では普段より笑顔が見られ、硬く冷たい意見がなく、みんなを笑わせるような発表もあった。シェアリングでは「写真が面白かった」と答えた。

2) 本実践の結果・考察

本実践の結果、生徒同士のコミュニケーションについては、写真の撮影時および発表内容の想像時に活発なコミュニケーションが見られた。特に、今まで集団活動に積極的には関わっていなかった生徒が撮った写真を見た時には、その題材についての質問が出るなどの相互啓発が起こった。iPadを囲って見るこ

とによる題材の共有によって、拡大・縮小によってよく見るだけでなく、お互いに意見を交換しやすい雰囲気を作り出すことができた。考えをまとめていく過程でお互いに話しながら考えられることで、いつもの活動よりも発表しやすい環境作りや、ユーモア性のある発表が多く見られた。

生徒と支援者のコミュニケーションについては、筆者以外の補助員と相談員は生徒と同じように参加してもらったため、写真の撮り方などのiPadの操作について、生徒が支援者に教えることでコミュニケーションが行われている場面が見られた。こうした最新の機器を体験させることで、生徒の気持ちを活動に向けさせる一助になった。

また、操作や会話に参加していなくても、他の生徒の姿を見ることによって行動の変化が起きたり、対人関係を促進したりし得るという結果を得られたことは、不登校への集団対応において意義があるものと考えられる。

本実践においても、中心的な生徒が他の生徒を誘ったり、積極的に参加することを呼びかけたりしていた。他の生徒が見ていることや考えていることを知ることで、自分の考えをまとめたり、新たな気づきが生まれたりするきっかけとなったと言える。

以上の結果から、不登校生徒の集団活動においてICTを活用することで、生徒の積極的な参加を促し、コミュニケーションのきっかけを作ることや活動の目的をより効果的に達成するための一助となることが明らかとなった。

また、同じ内容のものを示しても、生徒によって受け取り方や関わり方が異なり、その効果も変わってくるのが明らかとなった。捉え方の違いによる行動から、お互いの相互啓発につながっていった面と、共通の効果が得られないという両面の結果があった。個別対応の場面が多い不登校対応であるが、復帰へのステップとして集団活動が重要な意味を持つ。その上で本実践の結果は、不登校の集

団対応におけるICT活用の可能性を認める上で、意義のあるものであると考えられる。

(4) 適応指導教室での実践のまとめ

本研究では、不登校進行段階に応じたICT活用表に基づき、適応指導教室において実践を行い、その効果を検討した。

実践の中では、実際に学校復帰や、直接の登校刺激となるような事例は見られなかったが、ICTを活用することでこれまでは見られなかった、支援者や不登校生徒同士の会話、やりとりなどのコミュニケーションを促進することができた。特に、これまでは関係を維持するのが困難だった生徒とのやりとりを継続・発展できるようになったのはICT活用の大きな効果であると言える。

以上から、不登校生徒の学校復帰や社会復帰、状態の好転の前段階となる「関係性を深める」という点において、ICTが大きな力を発揮を発揮することが示唆された。そのイメージ図を下記に示す(図)。

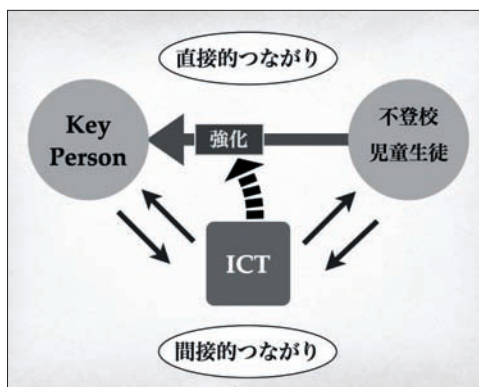


図 不登校対応におけるICT活用の効果
についてのイメージ図

さらに実践から、不登校生徒の不安が軽減されたり、前向きになったりする時に重要なのは、ICTによって即座に同じ情報を共有できることであることが分かった。

そこで、最新の情報通信技術によって可能となってきた、情報共有の在り方について考察を加える。

4. クラウド・コンピューティング

これからの教育環境を見越した情報共有の方法として、クラウド・コンピューティングシステムに着目し、その可能性を検討した。

検討した19の無料クラウドのうち、現時点ではその全てがiPadで利用できるわけではなかったが、アップロードとダウンロードに関する検証から、データの共有にかかる時間を大幅に短縮できることが示唆された¹²⁾。

これまで不登校児童生徒との情報共有は、まず直接会って、それから資料等を渡し、情報を共有するという流れが多かった。クラウドを活用すれば、まず資料を共有し、その上で話をすることができる。この「先に情報を共有する」状況の設定が、生徒の不安を軽減させ、結果として直接的なコミュニケーションの促進につながっていくことと予想される。

5. おわりに

本研究では、様々な不登校進行段階の生徒が通う適応指導教室において、その対応にICTを導入し、その効果を検証した。

検証の結果、確かにICTは、学校復帰や、直接の登校刺激になるような万能なものではなかったが、その土台となる支援者や不登校生徒同士のコミュニケーションを促進することに大きな効果を発揮した。

この結果に共通していたのは、ICTによって、他の人と即座に同じ情報を共有できたことである。今後、教育クラウドの発展によって、より簡単に実現できるようになるだろう。

不登校対応において、何が学校復帰や状態の好転につながるかはわからない。しかし、本研究で得られた「関係性を深めるといふ点において、ICTが大きな力を発揮する」といふ結果は有用な知見であると言える。

今後も実践を継続し、新技術の可能性を検証しながら、不登校対応における具体的な活用方法について研究していくことが課題である。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、文教大学大学院教授の井上清子先生、文教大学教育学部教授の会沢信彦先生には、研究の計画段階から論文執筆まで全面的にご指導いただきました。

また、実践分析研究校として多大なるご協力とご指導をいただいた埼玉県越谷市立大袋中学校学校長大西久雄先生、A市教育相談センターの先生方に多大なるご協力を賜りました。記して深謝いたします。

付記

本論文は、平成23年度文教大学大学院教育学研究科修士論文「不登校児童生徒への対応におけるICTの活用」を基に、その後の技術進歩によりICT活用の可能性が広がった部分について加筆、編集したものである。

また本研究は、2011年度文教大学学内競争的資金（学長調整金）による研究費の一部を用いて行った。

引用文献

- 1) 文部科学省「教育の情報化ビジョン」（2011）
- 2) 今田晃一・大西久雄・村山大樹「タブレット型情報端末機（iPad）を用いた授業づくりの可能性」『教育研究ジャーナル』3-1、2010、pp11-12
- 3) 今田晃一・大西久雄・村山大樹「CSCL（コンピュータに支援された協調学習）につながるタブレット型情報端末（iPad 2）の有用性」『教育研究ジャーナル』4-1、2011、pp9-10
- 4) 今田晃一・村山大樹「タブレット型情報端末を活用した現地学習～国立民族学博物館と連携した教員プロジェクトの検討～」『日本国際理解教育学会 第22回研究大会 研究発表抄録』2012、pp39-40
- 5) 今田晃一「デジタル教科書の動向とその指導方略としてのCSCL（Computer

- Supported Collaborative Learning)の検討」『文教大学教育研究所紀要』20、2011、pp7-14
- 6) 文部科学省「平成23年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」(2012)
- 7) 村山大樹・今田晃一・大西久雄「不登校児童生徒への対応におけるICTの活用～不登校進行段階におけるICT活用表の検討～」『教育研究ジャーナル』4-1、2011、pp11-12
- 8) 村山大樹・今田晃一・大西久雄「不登校対応におけるICTの活用～不登校進行段階によるICT活用表の検討～」『日本教材学会 第23回研究発表大会 研究発表論文集』2011、pp98-99
- 9) 村山大樹・今田晃一・大西久雄「多機能情報端末機 (iPad) を用いた不登校児童生徒への対応」『教育研究ジャーナル』3-1、2010、pp13-14
- 10) 村山大樹・今田晃一・大西久雄「ICTを用いた不登校児童生徒への対応～インターネット通話サービス『Skype』を中心として～」『教育研究ジャーナル』3-2、2011、pp7-8
- 11) 大西久雄・今田晃一・村山大樹「『生徒指導・不登校対応』の研究におけるICTの有用性～大袋中学校における実証的検証から～」『教育研究ジャーナル』3-2、2011、pp9-10
- 12) 村山大樹・大西久雄・今田晃一「教育におけるマルチタッチブック作成ソフト (iBooks Author) の可能性～iBooksを用いた実践事例とクラウド・コンピューティングとの整合性～」『教育研究ジャーナル』5-1、印刷中 (2012/09/25受付)